

# 令和4年度 各都市教頭会 研究報告 1

## 岐阜市小教頭会

### 未来を生きる力を育む 魅力ある学校づくり

岐阜市小学校教頭会は、学校数48校、教頭数52名。年間11回、定例で5つのブロック別研修会と4専門部会（研究・組織・広報・厚生）、小中合同ブロック別研修会（年間2回）を実施し、教頭としての資質向上に努めてきた。

今年度は、各校の取組状況や成果と課題を交流するだけでなく、全国大会や東海・北陸地区大会に参加し、研修したことを持ち寄って報告・交流を行った。とくに来年度は、実践発表（2B分科会）になるため、参加人員を増やし今年度中に準備できる事を確認した。

全国共通研究課題を受けて研修を進めているが、ICTの活用（ペーパーレス化、授業支援ソフト、連絡支援システム等）、職員研修（特別支援に関わる研修、若手職員の育成等）、働き方改革について話題の中心になることが多く、この点において教頭同士が直接、情報交流ができた事は大きい。

今後も、資質向上につながる様々な取組から、より一層魅力的な学校づくりを進めていきたい。

（文責 明郷小学校 松木 真由美）

## 羽島市教頭会

### 未来を生きる力を育む 魅力ある学校づくり

羽島市では、各学校の課題解決のため、教頭としてどう関わるとよいかを明らかにすることを研究内容としている。令和4年度は、「危機管理～いじめ・不登校、防災・防犯等について～」をテーマに実践交流をし、研究を進めてきた。

・児童生徒の困り感や、生徒指導事案に対して迅速に丁寧に対応し、継続的に見守る対応の在り方  
→複数の事案が発生しても、指導が後手にならない体制を確立できるように、組織の見直しやアンケートの取り方等の実践を交流し、各学校で改善を図ることができた。

・自分のこととして捉え、判断や行動ができる命を守る訓練の在り方

→基本的な避難の仕方の確認、通行止めの場所を設定、地域の防災士との連携、小中学校連携の引渡し訓練等の実践を交流し、各学校で改善を図ることができた。

（文責 中島小学校 又賀 明彦）

## 岐阜市中教頭会

### 子どもの発達に関する課題 教頭の職務に関する課題

本会では、25校32名の教頭が、4つのグループの2部制で実践交流を行い、教頭としての資質向上に努めている。

今年度は、上記のテーマに関わり、小中一貫教育や小中の連携、PTA活動、コミュニティ・スクール、関係機関との連携、教育活動のスリム化、危機管理に焦点を当てた実践交流を行った。

実践交流では、これからのPTA活動の在り方やコミュニティ・スクール、働き方改革やコロナ禍での学校運営、ICTの活用について話題になることが多かった。

また実践交流以外にも、岐阜市教育長講話や危機管理研修、スクールロイヤー研修などの研修を行い、資質向上を図った。

（文責 厚見中学校 戸川 健司）

## 各務原市教頭会

### 教職員の専門性を高め、魅力ある学校づくりを推進するための教頭の役割

各務原市小中教頭会では、5月と6月にそれぞれ講師を招き、講話による研修を実施した。2回ともメンター制に関わる内容で学び、その後、各校で実践をしていくこととした。11月に開催された「第50回 東海・北陸地区公立学校教頭会研究大会」での提言内容にもこの取組を交え、他県の教頭先生方とも協議することができた。

また、今年度は教員の指導力向上を目指した市のパワーアップ研修を活用する中で、教頭の役割を明らかにした。研修を受講した教員の中には、学び続けたいという思いを抱く者もあり、効果的に研修を活用することができた。

今後は、県外の教頭先生方からいただいたご意見も参考にしながら、さらに効果的な教職員の専門性を高める研修のあり方や、魅力ある学校づくりを推進していきたい。

（文責 那加中学校 村松 美千代）

# 各郡市教頭会 研究報告 2

## 山県市教頭会

### 組織を活かした学校運営

今年度は、「豊かな人間性と創造性を育み、未来を開く学校教育」の具現のために、今年度3年目となる「やまがた教育ビジョン2020」に基づいた各校の実践等の交流をもとに、研修を進めてきた。

昨年度に引き続き、GIGAスクール構想に関わって、授業や家庭学習で使えるアプリの情報やタブレットの活用方法の情報交流を定期的に行った。給食費無償化に関わっては、教頭会でも情報を共有し、事務職員との連携を図りながら、対応を進めることができた。

また、夏季休業中には教頭会として西濃学園の教育相談研修会に参加し、不登校の児童・生徒理解について研鑽を積んだ。

定例会では、全体交流・中学校区別交流を毎回実施し、気軽に話し合える雰囲気の中で、課題を解決し、各校の実践を深めることができた。

(文責 大桑小学校 鷲見 博史)

## 本巣市教頭会

### 豊かな人間性と創造性を育み 未来を拓く学校教育

本巣市小中学校教頭会では、昨年度に引き続き本テーマを設定し、本巣市教育委員会の指導を受けながら、年6回の研修会を行った。

研修会では、「風通しの良い職場環境づくり」や「働き方改革」、「校内研修体制づくり」など、様々な課題に対し、各校の実践事例を交流するなかで、各校の良さを学び合い、自校の取組に生かすことができた。

また、市教委学校教育課長のご講話を拝聴することで、管理職として大切にすべきこと等、教頭としての資質向上につなげることができた。

今後も、組織の活性化や教職員の資質向上等の課題について、働き方改革とのバランスを図りながら、研究実践を積み重ねていきたい。

(文責 根尾学園 新井 恒雄)

## 瑞穂市教頭会

### 校長の学校経営方針の具現を主体的・協働的に 図るための教職員への働きかけのあり方

本市は、各校が、理科・英語科・道徳科など特色ある教科の主題研究を推進し、研究の歩みを毎年市内の学校を中心に公表（3年に1回は研究発表）している。この主題研究を核とした研究体制において、力量の高い教員による示範授業を実施したり、研推長や学年主任が研究を推進し、全教員が日常の授業を互いに見合い改善したりできるよう、研究推進委員会や学年主任会の折に教頭が指導・助言することで活性化させ、若手教員の指導力の向上及びミドルリーダーの経営・分掌を推進する力量の向上を図った。また、若手教員への指導・助言を中心としたOJT研修を定期的に位置付け、講師をミドルリーダーにまかせたり、若手教員同士が対話したりする機会を設けた。

既存の研究・研修を主体的・協働的な体制にできるよう、教頭会で検討することができた。

(文責 穂積小学校 串田 茂)

## 羽島郡教頭会

### 豊かな人間性と創造性をはぐくみ、 未来を拓く学校づくりの推進と教頭のあり方

「順番に文書提案して発表するという従来の研修のあり方を見直し、教頭として真に学びたいことを見つけ、各校の実践や率直な意見を交流する中で主体的に学び高め合う教頭会としたい。」

令和4年度は、スクールロイヤーに学ぶ危機管理のあり方、若手職員やミドルリーダーの育成、働き方改革のさらなる推進等、今学びたい内容について年11回の研修会を実施した。

研修会では、全員が積極的に発言し、教頭として所属職員の資質・能力の向上を図るための指導力、行政機関等との連絡調整能力や情報収集能力、危機管理能力等、学校組織マネジメントに関する幅広い資質・能力を養い、高めていく必要があることを確かめ合った。

(文責 松枝小学校 榊井 奈津子)

# 各郡市教頭会 研究報告3

## 本巣郡教頭会

一人一人が大切な存在として認め合うことのできる児童生徒の育成

～北方町学園構想推進と関わらせて～

本巣郡北方町は、今ある1中・3小を閉校し、令和5年度に北方町立北学園と南学園という2つの義務教育学校を開校させる。小から中へのスムーズな移行によって、安全で安心して自分の力を育み発揮できる新しい学園のスタートに向けて、児童生徒がよりよい学園生活を創り出していけるようにテーマを掲げ、児童生徒の育成に取り組んだ。

具体的な取り組みは以下のとおりである。

- ・小中兼務教員による専門的な授業の実施。
- ・職員による児童生徒の学園化の期待や不安の聞き取りと方向性の共有。
- ・諸行事の共同開催。
- ・9か年を通した教科指導の系統の再確認。
- ・施設・備品の再検討等。

(文責 北方南小学校 大塚 康正)

## 海津市教頭会

社会に開かれた教育課程の実現に向けて  
～新型コロナウイルス感染拡大防止を基盤にして～

コロナ対応、進むGIGAスクール等、刻々と変化する学校内外の状況を的確に捉え、児童生徒の主体的な学びのため、家庭、地域と連携し「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し取り組んだ。

研究の方法は、以下の2点を継続している。

- ① SWOT分析による自校の外部環境と内部環境の利点の整理の上での校内実践
- ② 定例の市教頭会(校区ごとを含む)の情報交流

この数年、閉校開校や150周年記念行事等、保護者・地域と関わる大きな動きが本市にはある。これらをコロナ感染状況、施策等から、その時点でできることを判断、保護者・地域から協力を得られるよう、情報交流及び共有に努めている。また、GIGAスクールでは、常に次のステップの活用に向け方向付けをしたり、年齢層が二極化する職員に対し、それぞれやりがいをもって職務にあたれたりするよう、SWOT分析によりその強みを発揮させられるよう働きかけている。

(文責 城山小学校 木村 哲也)

## 大垣市教頭会

未来を生きる力を育む 魅力ある学校づくり

キーワード〈自立・協働・創造〉

令和2～4年度の3カ年で、上記のテーマの具現に向けた取組の実践交流をしている。

特に今年度は、「教職員の専門性に関する課題」に重点を置き、学校規模や校種を考慮した4つのグループに分かれて、各校の実践を学び合った。

課題改善の実践からは、主に①「働き方改革」に関わる内容と、②「教員の指導力向上」に関する内容の実践が報告された。

①では、勤務に関わる意識改革や、ICTを利用した業務軽減、行事や業務の精選に関わる取組。②では、ミニ研修の実施や主任層や学年組織の活用、メンター制を利用した取組から学びを深めた。

次年度は、新たな課題をテーマにした実践交流を通して、魅力ある学校づくりの具現へとつなげていきたい。

(文責 荒崎小学校 奥村 直也)

## 養老郡教頭会

ひとりひとりが輝く教育の創造

～地域の教育力とICTの活用を通じた「多様な学び」、教職員の資質の向上、やりがいのある職場の推進～

今年度は、「教職員の専門性に関する課題」に重点を置き、「メンタリングおよびフォローアップ研修等の充実」を共通実践として取り組んだ。

【具体的な取組】

- ・すべての小中学校で共通アンケートを実施し、若手教員、ミドルリーダー、ベテラン教員それぞれの意識を把握した。
- ・アンケートの結果を分析し、校種や学校規模、学校の実態に応じた研修を各学校で実践した。
- ・月に1回ある教頭会では、その実践を交流し、学びを深めるとともに、有効性や課題等について議論した。

次年度は、各学校の実践を共有し、校種間・学校間を越えた研修等を位置づけ、教職員の資質向上に努めていきたい。

(文責 東部中学校 林 徹爾)

# 各郡市教頭会 研究報告4

## 不破郡教頭会

豊かな人間性と創造性をはぐくむ学校をめざして  
～ 教職員一人一人の資質や能力を  
高めるための教頭のあり方 ～

児童生徒が、「豊かな人間性」と「創造性」をもって、目的に応じて柔軟かつ合理的に解決策を考え、実現に向けて進めていく力を高めるために、教職員が確かな指導力を発揮することが必要である。そのためには、教職員が自分の指導を真摯に振り返り、自らの資質や能力を高めていく不断の営みが必要となる。教頭として、その営みを適正に指導・支援していくことを目的とし、研修を進めた。

(1)喫緊の教育課題について、講話や各自で参加する各種研修により、子どもを取り巻く社会の現状や地域社会における学校のあり方などを学んだ。

(2)「業務改善・働き方改革」「教職員の資質向上」「危機管理・防災」をテーマとした実践交流で、具体的な校内業務の改革の仕方や、教職員に対するかかわり方、人材や関係諸機関との連携について、勤務校における各自の実践から学び合った。

(文責 府中小学校 大矢 浩史)

## 揖斐郡教頭会

「子どもの発達に関する課題 ～生きづらさを抱える児童生徒への教頭の役割～」

近年、児童生徒を取り巻く環境は大きく変化し、学校に上手く適応できず、生きづらさを抱えて生活する児童生徒が増加している。誰もが個人として尊重され主体的に生きる力を身に付けることができるよう、教頭が果たす役割について、研修を行った。

教職員の専門性を高めるために、教頭が中心になり外部の講師や特別支援学級担任を活用して研修を行った事例、児童生徒が安心して生活できる環境整備を教頭がリーダーシップを発揮して行い、児童生徒や保護者との信頼関係を構築した事例、教頭が小中間や外部機関との連携の窓口となることで、円滑に引継ぎや情報共有ができたり、支援や助言を受けやすくなった事例等を学び合い、自校の実践に役立てることができた。

(文責 北和中学校 高橋 篤)

## 安八郡教頭会

誰もが自己肯定感をもち、  
生き生きと生活できる学校をめざして  
～組織の活性化を図る教頭の役割～

「子どもたちに自らの伸びを実感させ、自己肯定感をもたせる」学校づくりを推進するにあたり、教頭として組織を活性化し、若手教員に限らず教職員一人一人の指導力を高めていくことが重要であると考え、上記主題を設定し、実践を行った。

(1)組織を活性化するための校内体制の工夫

経験年数に関わらず、全校に関する仕事や教育実習の担当を任せ、複数職員で担当することにより、アイデアが充実し負担も軽減できた。

(2)教職員一人一人の資質や専門性を高める研修の充実及び取組

ICTを効果的に活用した授業づくりの積み重ねができている。研究授業を積極的に取り組める環境をつくるなど、互いに学び合える場を広げることができた。

(文責 神戸中学校 山中 好美)

## 関市教頭会

夢のある明るい学校づくりの推進  
子どもの発達に向き合う取組と教頭の役割

保護者や地域と連携して、可能性と夢を求めて生活できるような学校・家庭・地域を築き上げていく必要がある。そのために、様々な要因を抱えた「困り感のある児童生徒への対応」が必要不可欠であることから、幼保小中・地域連携を進めることに加え、ICTの活用による効果的な支援体制を構築する必要があると考えた。

(1)個に応じた支援・指導を行うための体制づくりと連携  
(特別支援教育の充実)

(2)各校の実態に応じた幼保小中学校間の連携と接続

(3)タブレットを活用し、児童生徒の主体性を伸ばす教育の推進 (ICT環境整備と効果)

個への指導を充実させるために、指導力向上、外部機関との密な連携、一貫性のあるカリキュラムや指導の見直しを積極的に進める必要がある。

(文責 桜ヶ丘中学校 後藤 剛史)

# 各郡市教頭会 研究報告5

## 美濃市教頭会

教職員の資質向上と職務意識の高揚  
～ミドルリーダーの育成を通して  
チームを高める教頭の役割～

美濃市の教職員の年齢構成は、20代と50代が多く、30代後半から40代前半のミドルリーダー層が極端に少ないという現状である。また、どの年齢層においても指導力の向上も含め、教職員の専門性を高めることが課題となっている。

研究の1年目となる本年度は、各校の実態と実践について交流することで美濃市教頭会としての重点を探る取組をした。教職員の専門性を高めるために、校内研修の充実と工夫、若手教員の育成について、ミドルリーダーと連携を図り学校組織を高めることに取り組んでいることが分かった。

来年度以降、教職員の専門性を高める取組を美濃市のどんなよさを生かして実践していくのか、テーマに向けて手法を絞り取り組んでいきたい。

(文責 中有知小学校 安田 正治)

## 美濃加茂市教頭会

だれもが「学校が楽しい！」と言える学校づくりの  
推進 第3課題の研究実践を通して

第2次美濃加茂市教育振興基本計画『FROM・0歳 プラン2』のもと「学ぶ喜び・学び合う楽しさが実感できる授業づくり」や「自己有用味の味あえる居場所づくり」「異校種間の連携と地域ぐるみの教育環境づくり」に重点を置き指導に当たっている。

令和5年度県研究大会実践発表に向けて、令和2年度より教頭会第3課題について、それぞれの学校での実践交流を行ってきた。令和4年度は、「教育の情報化に関すること」に研究の視点を絞り、『AI採点システムの導入(中学校)』や『ロボットを使用したプログラミング学習(小学校)』など、各学校での実践を交流した。コロナ禍においてもWEB開催による全国教頭会岩手大会をはじめ、東海北陸教頭会静岡大会・岐阜県教頭会研究大会が実施されたことで、各校の実践の参考とすることができた。

(文責 西中学校 片桐 宣伸)

## 郡上市教頭会

組織・運営に関する教頭の役割  
～チームとしての学校を創る 教頭のマネジメントを通して～

本市の課題について、「若手教員の育成やICT活用」「生徒指導の充実」「特別支援教育の充実」の3つに焦点を絞り、市内の教頭が互いに繋がり関わり合いながら組織・運営に関する教頭の役割を明確にした共通実践を図り深めたいと考え、本主題を設定した。

研究2年目の今年度は、まず、各自が自校の外部環境と内部環境の利点を整理したSWOT分析を行った。その結果明らかとなった学校課題や上記3つのテーマを考慮したグループ編成を行い、実践交流を通して成果と課題を共有する場を設けた。

研究3年目となる来年度は、「人・もの・こと」を繋ぐ教頭としての役割を明確にし、チーム郡上の共通実践内容をより焦点化して効果的な手立てを明らかにする方向である。

(文責 大中小学校 三浦 一之)

## 可児市教頭会

豊かな人間性と創造性を育む  
笑顔の学校をめざして

笑顔あふれる学校づくりをするためには、教頭が校長のビジョン（「笑顔の“もと”」）を受け、その具現のために組織を活用し、教職員に具体的な指導助言をしていくことが必要である。そこで、教頭の資質向上を図るため、下記の3点について各校で実践に取り組み、発表・交流を重ねた。

- ①学校行事の運営の工夫
- ②学力向上のための働きかけ
- ③職員の資質向上の在り方

併せて、児童虐待対応研修を実施したりコミュニティ・スクール実践校の発表を聞いたりする機会を設けた。交流や研修を通して、子どもたちの笑顔のために、児童生徒や職員の自己肯定感を育むことだけでなく、児童生徒の安全を守ること、地域と連携することの大切さも学び、教頭として必要な資質・能力を向上させるためのよい機会となった。

(文責 広見小学校 福井 信広)

# 各郡市教頭会 研究報告 6

## 加茂郡教頭会

### 子どもが安心して過ごせる学校づくり・ 分かりやすい授業づくりを目指して

サブテーマ「魅力ある学校づくりに向けた教育環境の整備」を掲げ、「協働性」「継続性」「関与性」をキーワードに研究に取り組んできた。

本年度は、2年ぶりに一同が介して実践交流を行った。成果としては、コミュニティスクール活用の充実がある。地域差はあるが、学習活動の外部講師、校外活動の見守り、校内の環境整備・修繕などの連携した活動が展開された。また、若手・中堅教員育成の充実がある。メンターチームを組織したり、研究会を意図的な少人数チームで進めたり、学年会を充実させる日課編成をしたりするなど、職員が思いや考えを聞き合い、助言・見届けがしやすい実践がなされてきた。今後は、地域や関係機関との連携の魅力を発信して広げていくこと、職員の授業力と学級経営力を高める効果的な組織・研修を更に探究していくことに努めていく。

(文責 坂祝小学校 飯尾 友謙)

## 多治見市教頭会

### 組織マネジメントによる学校力向上のための 教頭の役割

今年度は上記のテーマの具現に向け「学校課題の把握」「働き方改革に向けた業務の効率化」を重点項目とした。加えて、GIGA School 構想の推進に向け iPad の効果的な活用についても研修を実施し、勤務校で教頭が、推進役の一翼を担えるように試行錯誤しながら実践を行った。主として以下の3点に取り組んだ。

一つ目は、SWOT分析による学校課題の明確化と組織マネジメントの実践交流を行う。各学校での実践や学校課題に対して、自校に於いてどのような実践ができるのか、どう活かせるのかを意見交流をした。

二つ目は、「働き方改革」に向けた業務の効率化や正確な勤務時間の記録などについて交流し、適切な労務管理の方法について研修を行うことができた。

三つ目は、多治見市のGIGAスクール構想に向けて、iPadを活用した健康記録カードのデジタル化会議のペーパーレス化など、実践を持ち寄り自分たちで知識・技能を高め実践化することができた。

(文責 南姫小学校 坂田 俊広)

## 可児郡教頭会

### ICT活用を推進する小中連携の在り方

タブレットを活用した授業実践の交流を積み重ね授業力向上を目指す。教頭として、小中が連携して取り組むことで、活用方法や活用効果を知る研修する機会を増やし、職員のICT活用意欲を高め、ICT活用の推進を図った。

- ① 学校区ごとに、全校研究会授業を小中両校の職員が参観した。
- ② 参観教諭が学んだICT活用の有効性について実践を紹介しながら情報共有する場を位置付けた。
- ③ 研究授業のまとめや参観者の授業レポートを小中両職員が共有できるようにした。
- ④ 相手校の実践を踏まえ、ICT活用の視点における授業研究の方向性を、適宜修正した。
- ⑤ 児童生徒が9年間で効率よくICT活用能力を身に付けられるよう、指導計画を検討した。

(文責 向陽中学校 可児 美紀)

## 土岐市教頭会

### 「生きる力」の育成と今日的課題に応じる 教育を推進するための教頭の役割

～学力向上に向けた授業改善における教頭のあり方～

「確かな学力の育成」に重点を置き、学力向上推進委員会と共に、校種間連携を強化し「土岐市スタンダード授業」を切り口に授業改善を進めてきた。推進指定校の実践から、課題解決にむけての職員指導と教頭の役割について学んだ。特に以下の交流研修を中心に実施した。

○9か年教育によるきめ細やかな指導

○効果的な学習環境(ICT)の整備

小中連携や学習環境整備(ICT)での調整及び指導を意図的計画的に実施したことで、校内や校区内の若手教員とベテラン教員の連携が深まり、児童生徒の「やってみたい」を引き出し、「できた」「わかった」と実感できる授業を通して、感性や想像力を発揮して、児童生徒が自分の考えを広げたり深めたりする協働的な学びにつながった。

(文責 泉中学校 遠山 唯史)

# 各郡市教頭会 研究報告 7

## 瑞浪市教頭会

### 学校の課題解決に向けたシステムの構築

瑞浪市教頭会では、学校課題の解決についてのマネジメントを学び合うために、計画的、意図的な実践交流と研修を行った。

実践交流では、「コロナ禍の学校経営」「コミュニティ・スクール」「情報共有システム」「働きやすい職場環境づくり」「職員の資質向上」「職員集団の組織化」「危機管理」「特別支援教育」「教育相談」「PTA活動」について学び合った。また、研修では、外部講師を招き「危機管理（防災無線）」「地域学校協働活動」、市教育長による「今日的教育課題」「市の現状と対応」「働き方改革」など多岐にわたる内容について学び合った。

様々な交流や研修を通して、教頭としての対応や在り方を学び合うことができた。これらの学びを学校課題の解決のためのマネジメントやシステムの構築に生かしていきたい。

(文責 明世小学校 安藤 智)

## 中津川市教頭会

### 自校の課題をふまえ、 教頭として力を入れて取り組んでいること

中津川市は昨年度に引き続き、県教頭会の6つの課題の中から、自校の課題の克服を目指し、教頭として力を入れて取り組んでいる実践や中津川市の教頭研修会で話題にして追究したい課題を取り上げ、互いに学び合うことができる研修を行った。

9月から2月までの教頭会で実践交流の場を設け、毎月、主提案と副提案それぞれ1名の提案に対して意見交流を行い、研修を進めてきた。特に主提案については、市内の校長会に指導者をお願いし、指導・助言と講話をお願いした。

「制服とLGBTQ」や「児童理解」、「不登校対策」、「教育相談体制の在り方」、「学校運営協議会の実践と今後の見通し」、「全校研究体制の構築」など多様な内容で意見交流を行うことができ、学びを深めることができた。

(文責 南小学校 加藤 高祥)

## 恵那市教頭会

### 組織の活性化と教職員の資質向上 ～若手教員の主体性を育む取組を通して～

恵那市では、新採3年目までの教員が約3分の1、20代の教員は約4分の1を占めている。また、小規模の学校が多いため各校の実情に応じて教員を育てていく必要がある。そこで、次の3つの内容から若手教員の育成を図った。

- (1)教科指導力の向上を図る取組
- (2)学級経営、生徒指導の力を伸ばす取組
- (3)ICTを活用した指導、支援の取組

複数校をリモートでつなぐ遠隔授業や合同教科部会、外部講師を招いての専門的な研修、生徒指導の在り方や特別支援教育の重要性を学ぶ研修などを教頭が橋渡し役となって実施してきた。こうした実践を通して、若手教員の自信を高めることができベテランにも刺激となって一体感が生まれた。

(文責 岩邑中学校 小南 茂樹)

## 高山市教頭会

### 挑戦し続けるたくましさの育成 ～ふるさとと協働する学校づくりを通して～

市内の全小・中学校がCS3年目となり、社会に開かれた教育課程が求められている。

高山市には、19の小学校と12の中学校があり、それぞれの学校規模や地域の特色を生かした教育を進めている。研究は、地域の特徴を生かし小・中の連携を図るために、市内31校を中学校区や支所地域等を7ブロックに分けて進めた。

7ブロックごとのテーマを設定した。テーマは、幼保小中連携・学校運営協議会との協働・個の発達に応じた支援・不登校対応等、ブロックごとの課題をもとにしたものとなっている。

実践交流は年3回行い、各自がテーマに沿って実践したことをブロックごとで共有し、児童・生徒のたくましさを高める研究を進めた。研究を進めることで充実した研修となり、勤務校の教育活動の向上を図ることにつながった。

(文責 北小学校 梶田 哲也)

# 各郡市教頭会 研究報告 8

## 飛騨市教頭会

### 「志を語り合い しなやかに挑み続ける飛騨びとを育む」教育を推進する教頭の役割

～地域の特性を活かしたふるさと教育の実践を通して～

飛騨市学園構想を受け、地域と深く関わりながら未来の担い手を育成することを教育活動の核として取り組んでいる。各地域の特性も踏まえ、「地域とともにどうやって子を育てるのか」を、学校運営協議会と共有し、教頭がいかに舵をとりながら持続可能なシステムを作っていけばよいかを、各校の実践をもとに交流した。

- ・数年前から学校運営協議会の経営を市ぐるみで行っている山口県光市の教頭会と、オンラインでつなぎ、互いに交流した。ここで得た取組の良さを教頭会でまとめ、その後の各校の取組にも活かすことができた。
- ・各校の地域学校協働部において、地域と学校を結ぶ核となる人材（ふるさとアドバイザー等）の人選を、教頭が中心となり進めた。また、「どのような人材がより今後も持続していけるのか」を、教頭会で情報交流したり、実際に活躍してみえる方を紹介してもらったりした。

（文責 古川中学校 中島 英人）

## 大野郡教頭会

### 心豊かで、たくましく、ひとりだちする子 ～ふるさと白川郷に夢と誇りを～

「ひとりだち」する児童生徒の目指す姿の具現化に向けて、教頭の果たすべき役割について研究を進めた。

学力向上に向けた授業改善では、付けたい力を明らかにした研究構想に基づく研究推進や全職員に向けた研修会等を通して、職員の授業力及び資質向上を図るとともに、学力向上推進教師や研推長、ICT教育担当への指導を行った。

地域との連携では、ふるさと白川村の魅力を学ぶ「村民学」において、各学年の活動で児童生徒と地域の方が直接関わり、その思いや願いにふれる場を多く設定した。また、保学一貫教育の充実を図るために、園児や児童生徒の目指す姿の具体を共有することを大切にして職員への指導を行った。

（文責 白川郷学園 折敷地 浩平）

## 下呂市教頭会

### 自分らしく生きる子どもの育成と 教職員の働きがいのある学校とは ～学校、家庭、地域社会との連携について～

今年度の研究は、小学生全員にタブレットPCを導入したことと、全中学校で16:30活動終了の教育課程を実施したことを受けて、以下の2点とした。

- 1 小中学生の発達段階を踏まえた効果的なタブレットPCの活用
- 2 16:30活動終了の取組についての検証

成果と課題は以下ようになる。

- ・タブレットPC使用時に必要なスキルを系統的にまとめ市で共通して指導できる体制を整えた。
- ・生活の変化について約7割の生徒、約8割の保護者が満足していると回答した。職員のR4年度の4月～7月における時間外勤務時間はR3年度と比較すると月平均で11時間削減できた。
- ・教職員の勤務時間をただ減らすだけでなく、教職員のゆとりを生み出すことで、教職員のもっている力を生徒のために発揮できるよう改善を行う。

（文責 下呂中学校 小川 潤也）